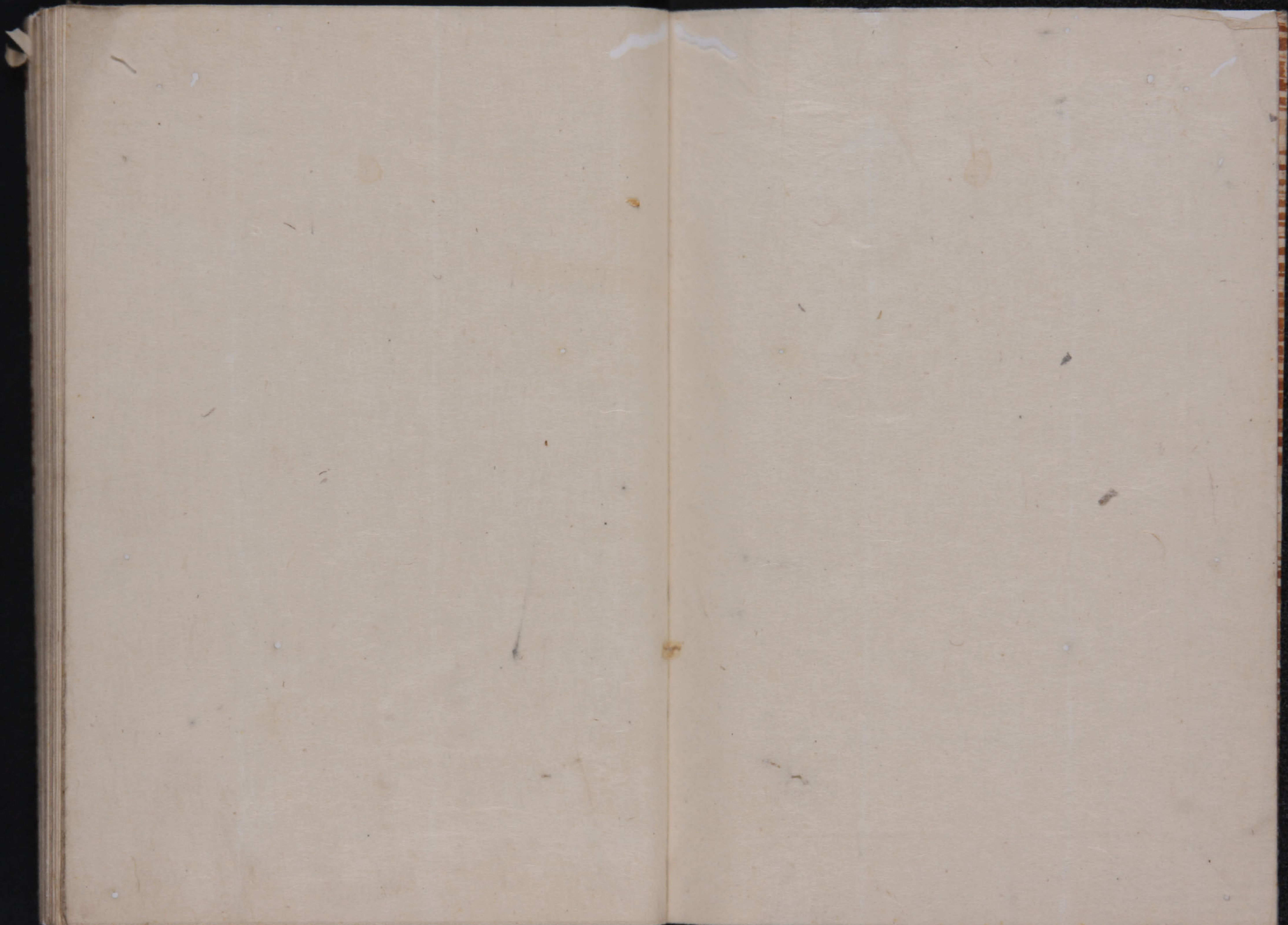
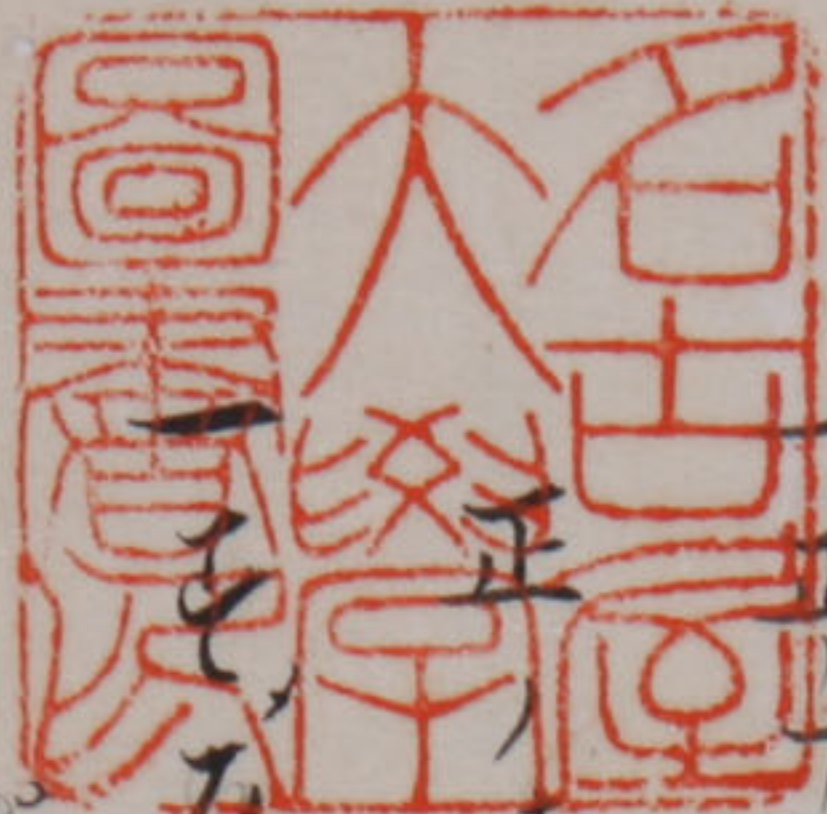
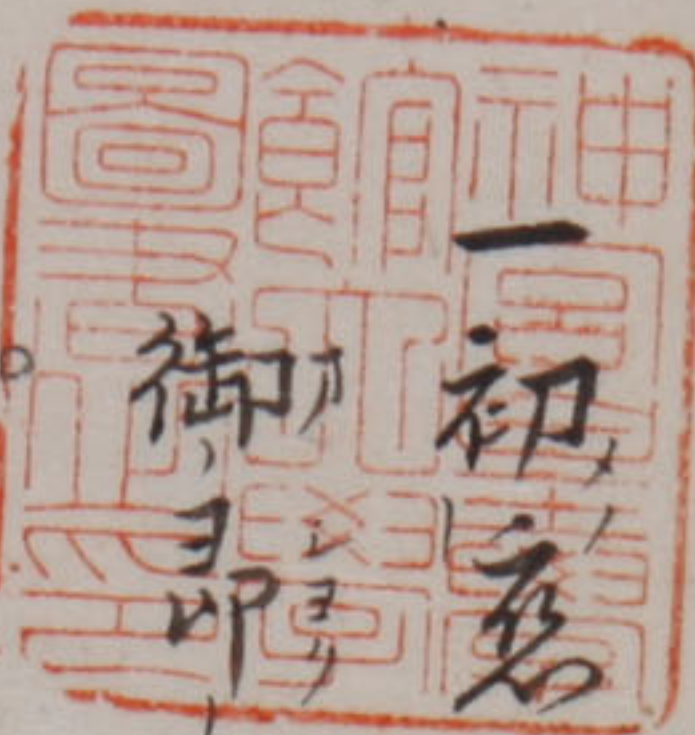


六窓塵談

名大図
911.107
Ma
0







一初意

初花

初郭公

忍意

御製

勸孟

御印位

元日

光明峰寺

一正一位

正一位

従一位

テヨム



清濁神人位同夏也如上をこにこは

一をたろあへてをーあへてはあへにおか

あゝさ 荒和後 天のかく山 かく山 推中納言

稱ス 先達

春霞 清テヨム

一条兼良

教ちるを

小大君

一 本撰子限くもをぬれ字の名おつー此とむ
一 ちん屋敷を存くいつきおても一内府公
源氏法海派の法或ハも存く一法海と兼又
ハをん存く一法海と兼一也

一 彦望 山川 川舟 清光 行 守 位置

一 撰寄合 寄合の事おく一別して寄をえら
む時の事こ

一 海辺 カイヘントモ 池上 ナシマウレ 屋上 ガクシマウ 寄山 ヨスル 寄山 ヨセテ

ウミノホトリレ イケノホトリレ ホトリトハヨレス 心遠フ故也 ニ ニ

一 耶ハ心かく空うき換ぬとねぬるうふとこ

一 山路 海路 山遠赤人 直幹 信直 三首 千首

マニナ カイロ マニ タ、モト ノフモト ヨノサカ あこあこ あこ あこ あこ あこ

一 乃乃好り たつきと知ぬ

一 学乃好あへ修ゆくとしお好あこ心めてあつとこ

一 けつさあやう

一 停帯拍浪瀬疑抄うきこ也 かこ月桂ハあこ

常ハ如此 ヨム 持明院ニハ 如此ヨニル

一行人 遊子 旅人 ありきりあはれく人の多し

一併按抄 桐火桶 定家作也 轉、木未傳作こ

うさるハあまこも口角のそねあま

一七夕の寄書 拙先ツ 朝平、系のお孫をたつて五 禁中ハ

ヨリ 硯七面用之こ一硯一面宛ふ事、系のお孫を入て是

をとり 搦、系七枚、七その最をそそりて之の少物あり

子細形一 搦、系七枚をかさひて 搦、木の皮を素類多品

こめて置たり、系中あらしくこ巻て 結を屋福又如とも

あきて手向也 搦ハ紙あまをく 搦、空少清あり、但搦

とまききを一木二名、少なり

一政為らる、道遠院殿のありか一 ちき也 西三条三代の

内あてハ 祢名院あり一 姉上 基 經 讀手は 赤子 見の寄ハ 務

せしこま昔ハ ちくちく 寄之 烏丸 光廣ハ 上子 加也

とぬふい、や 搦、系 祢名ハ 形支こまきこも 寄あて 兩乃

ぬり一こまきこま 正代の 上子ハ

後水尾 標今の有柄川の 文 標 古 墨 用 也

一中院家の妹ハ通^{スケ}方々ニ寄付名の世阿弥ハ
通村々々ニ通茂々の又通純と云む

一今時の師範寺チ在宗通といはれまきとて此寺殿は

一^一也終らハ何事^一居ら^一といふハ師範とて師通

と云ふ

一勅撰の御彩ハ清殿建々この記^一在和歌所同盧

といふ^一又^一在^一手傳人^一在^一寄人^一といふ^一は^一多^一羽院の法

師ハ常とあり^一今和歌取記と云はれまきとて

一地下ハ山^一は^一さ^一次^一の外^一歌^一也^一と^一は^一り^一ふ^一は^一さ^一ゆ^一

一^一に^一昭^一不^一と^一さ^一次^一行^一不^一法^一と^一は^一いつ^一也^一

と云む

一山子^一親^一ハ^一限^一と^一一^一信^一吉^一也^一ハ^一休^一キ^一在^一禱^一ハ^一住^一吉

一^一昭^一不^一ハ^一海^一と^一に^一持^一と^一昭^一不^一也^一や^一ハ^一詠^一

一^一如^一空^一洞^一ハ^一知^一と^一云^一と^一也^一

一^一あ^一と^一云^一ハ^一漢^一ハ^一不^一有^一と^一申^一不^一也^一ハ^一あ^一と^一云^一ハ^一か^一や

一^一母^一屋^一と^一是^一ハ^一先^一ハ^一か^一き^一と^一唱^一り^一あ^一と^一ぬ^一ハ^一休^一と^一

つゝも一髪もほつりかのことめてあつたりと我思
りありぬ。月や何れぬも何れもささこ

一陸多分書を廣く名馳りしことあるをいつ

も何れも物に寄るの節りの寄るをいつて出立し

一今の体明衆をかせの何をかせの今も明を馳せ

ごと一向にお出り後人の寄る詞をいつ先風情を

云終りをいつて寄るをいつるありし一井睦抄

卿も小寄の寄るをいつてふれと何れ

一燭火と埋火とのふれ口寄指をいつるふれもふれ

三火とふれもいつかめらといつけ指し

一折家の室を山の政あるいひ方中納言のいはる

中と一屋をいつ空同も女指その通りと常は大中

納言指をいつるこおしとさやうにお出入り考

の詞におつこさぬといふと予が中院殿前中へ

参りておつこさぬいし指様よくいやねと

一表もまうしに連歌の嬉詞をいつるか

いふふもをううといふもをむとこ

一名おれ又文字横ち取本のくく此の敷ハ
おまを下れ又文字あわさとして若くは

一初めを送るハ二字のゆい送り次二字初め下の字
偏くはあわ一字送りこ横お外花おの、字をぬり

う

一下五文字あ取つていっあせんごわらばを以か、
せんやこを外七文^字乃内あてといっあせんごを清こ

一物語の外敷を中お押ハ初層う定家の書き
たろ物おいつとの端のあう表紙おをみ書初ひ
一お文字消ろ取ろはらたろあへお後お取
様やうお外敷を中お押あさきしん
り形おて今中お押こをうつおし書こを同
一お書初右枚を左に左枚うり書こを同
定家の抄物をあししてあさ家

一通茂々詠おのう概清海歌のは作らきし

ハ初は金葉もて分り換せしを西行の謔もて
玉葉の風雅もて風辨換し一為葉の風も辨り
堂教を教阿の良基もよ上より言はせし
那くていせりつたし少きを先りそり風辨を
そみ改めし近事長嘯をよめあし
ありてあまじきもそよ休か公家み力もよし
んそ風も後らりりし梨

一春の長嘯の才子もて上より長嘯の分り言

用ゆへあちろへ初よりうて熱き歌ものこを
おきてうらまを阿ちろへ折る屋も換あし
言したるものこいま堂上あちを言はし
葉しるしうて加屋もよりら形も徹書記乃
そ風辨り

一地下の公家の歌を杉屋宿をよき加屋
そくそをあちろへあちろへひそり加
そくそをよりしけねしとともか換も清て

いつとも形ふらうく形ふこ

一親勺跡の尾今今の子ふと女種あうと持ふ

裏清舎始子

通茂々

のちろ雲あけは海ひ雲乃あまきあけほの山ひあひえ
是跡勺こ

一偏序影曲流とひふあまを同母を思ひけり
ぬ之あうく多きをこれつうくを思ふか形ふこ

一右今序を思屋まきううくハ人のあうろをたひ

として志清輔能居ハあまつをたひとして
こりさきこ

一右今序ハ初乃たつこあうを恒世を宇治山と人

ハあま形ふけたはこを翼めてハあま形ふ立力

形ふこつふく一説之説にさきハあま形ふ事のおと

をあこつふあまこつふあまこつふあまこつふあま

とあま形ふををつくはこ

一人のあまをこりてあまを体一句く口は子を

一てうちの法うう——うをすねをさるるあり
小女形を

一日、急ハ招を味友の座うてまらうう系小風六
くこけ分新古今増抄ゆ子細あつてこ—
を建敷のま本小を記とをを尋うせ—小
席かちてまらうとつふうつうはくぬ換る記
ゆへねつし志うきこも名味うつううてあうと撰
ちう本下風ハきううてとつふと印—こも也

はうぬ扱あきこもいみ、はくまこ

一ハ雲口傳とつふ事を問うせ—小風巻
物小書—を雲息内府公、持来うて用小
立ものあり左のう写—意こ—式とうかひ
—さきう歌あちあ少法魂—て写—てまけ
坐法まこすハ盤舞のまこく写せ—ねう
神祇のまこく方二方神代纂系疏小阿うま少
形を

一 予内府公ありて百人一五ヶ大寺こいふこと
ありて何ありしこいふ事こきく志やのこ
作ありしこきく在かやうとこいふ上りし
知ぬと作らざりし

一 実教の我後ハ古今傳文終へら福小恙量あふふ
由つて度りし能成呪ハきこつてとあ難福再
授けし一屋きやと仙洞、空祝きしうち小能呪死
きし也

けヶ条本文ニ書居し以て

一通茂々の後中尾帝より古今傳お傳き好
又西三条殿よりお傳き
一うたりの水のあそむるこおとひ川たえを
流すのうとハ漢あひも寧とつ字のふこ
一原氏秘傳臺上おもひかといふ女秘傳語秘
凌の記こ十箇の方事ナニの難義あつ難候
ハ大事ありてハ形しこらふくらこ揚名女こり
一四のこちこのおおれぬくらハ三ヶの方事こ

乞をうらうらうの歌、こ^{ヒコウトウ}平双^{ヒコウ}病ハ上下の句の
上の字、甲一う、こ乞もさうの歌、こ

一歌仙ハ公任々の撰き——ハ歌教多岐も有
一そのもの何れをきき、後成々こそういふおされ
——本^{シマウ}と盛とつあ者、又左右ふりち——こ

河上、——

玉清や梅、流をそ風不家海ゆり——川上の月
通茂
一歌通茂々の秀歌の内こ実教々梅、流を

そ風あて、うく家海ゆり——きに乃福こも今
体うやうの歌、うむ者あ歌は——さこ也

織女娶久

通茂

あこふむむ秋の衣は穿つハ神代のは、此星合の空
七夕清舎は歌あて通茂々秀歌の内こ詠歌大
概清海歌の時自己は胸中の垢ぬけて心
こむと好歌出来る空云ふあて自分の上を
川ハゆりねきこも一歌六月下あつ、此歌を續

て実教の事うかひしふるくおらこて名は
何ほ望語加へても直しつゝもとのたはあゆ
梅しおきても款出来に既すおは款を奉行
へつゝもあつたも出来を合をともをれ
て梅し多くお款向をあらてもおかおを
ごろく眠つてふお款出来しへ実教
おみせあつたお食くとおおひゆへ清浄
おまこ古人の血を吐つておお梅し心
をみて出来つたりと直しつゝ

をみて出来つたりと直しつゝ

一古より序おみこのおまおつてお
平生おをいおつておつてお

通辰

水産くみえしお苗を産むる女代の福と知
水産くおつてお文字常くおありらお
の内らるお田間をおつてお
たまおしお苗を植へお水産くものこを
お産つておつてお

朝夕水邊の立をえ雲を詠めても心をつく
おろすく

一うたてはうた、こ俗おうたてーとつおおかきひ
うろすかたと問おえくる

一急問賢注の奥如文、うみとらかこーと問お
今おえくる次むりーハお二カうらつうハを多お
何くときお名答をそのささお文のくり
のわけあかうくときこを格通村々芝磨石の

のころとともーとらこ

一人志きとあおおひをりーか^うと濁るんやさき
こもお形お^うおハ^うへー

一初は返り神てとらつこをち一その内よき
てもらーかーと 仙洞様浄作

林葉漸お

神はぬいつの雲らおとき神て林の指多お出ん
叶^うお^うら^うと^う定^お羽^うさ^うら^う刻^お通^お那^おハ^お法^お見^おる^お也
常彰

又風々吹く遠く遠くしりぞきて及所のこゝろ
こゝろえ移りてとせとこ

海邊之序

新ねたふ

まゝいた

此とけり新ねたふも入もたふとやし
一處をふる浦のふ人
ふハ新ねたふも入もたふとやし
一處をふる浦のふ人
いふとてやふたちこり
一入はつものこ

古寺郭々

入お かのの きて

たつひは寺に新ねたふも入もたふとやし
一處をふる浦のふ人
寺といふも乃如新ねたふも入もたふとやし
一處をふる浦のふ人
も月れ

山特雨

果 霧中一ふぬ袖の上

里人のぬるは花は後かうも
あはれくは返て山風を吹
里人あてハ里は返り新ねたふも
入もたふとやし
一處をふる浦のふ人

まねくと詞の表に記す

一 空陽水 秋をよみてうかぬ

常事

引年ほて流るる園とよこ海人つむ神ねらしてるる

仙人の妻ふにねりて万代をよみほせたる菊の石口

神ねるるまにねりぬるハこちりやねるまにち

うりやけ秋をよむこといしこ也次子お有賀せ伯

秋をよむ一はくをねる

成りつるねる名香いねりもあふねへ一ちねりのことせほせの白菊

以前内府公をねりうちねるハ名うはへ一

海世の名う菊いつはりてまゆとのたまひ

お空をけ秋庭の名うさうく海一あんと

ねり

一 日本書紀の海ハ名を名の方和のとねる

屋まふらうたの海ハ屋まふら屋のこねへ方和

元ハ方和より出る形

通茂

一 ねり出るねるもまやまを子ねさみたき髪のをみみたき

此歌をさひくしはみきをきかみた歌
といひつたたるこ

一草子集小

とふ言ひのみをさはへこやうとふ言ひとこえて
けころやうおと漬うはかと同然ころハ
行かん

ありさき

さ本歌ゆへ花言ひ此みあそふありさきや

のん形りたもひのみあそいもハ本歌の詞安へ

次

一三三三言提さこやくさわさひとこ形も居さ

かとおふり形も極といま歌

一古今集の籠うはくうつとーここつふ義理こ

さきともてふとあむうり

一口の者此もこつてうにうる人のあ形んのちをさき
つらほ

名のちつたさ此ちにはこり者ふあの人もあさ

こ程おちるゝあんのちあぢ人々急し加へし
也又ちまたるむも急し加へし

一初居して山流るゝつ子親今一教の安まわし
け款のふいふといふ程いま一教安たさふ
居して山流る目を見まよといふさアそまは
知まざるやけ今一教もつひ常軌と
ふ付拙者のつひとあまるとつひ心はつと
さま一初一教とつひを名ひ加へし今一教

海しゆはつゝあまるとつひ安むくとして山流る
たごり初居して昔はつひ云志うつゝさ
くとして山流るつひ初居は加はるま
やまゝつゝつひもつひつひ書をみして
つひと心を解してつひとつひ人々同安し
一重陽のふ登高右事つひ此つひ初九月た人
さつひを初將軍地流るの山つひ初つひ登高
相まつ故事つひ初つひ山つひのつひ

先づこゝを過ぎては乃於空のみ一歩 々々々々々々々々々々
巾のちう山は小名とみかを以て其のさうつら 幸隆
内府と巾う上流ありてこゝをさすなり
此より又空路に登^高らみ極ハかくの如く成
居る此との路は巾あり登^高極ハありぬ
をそえりちそいき山は此海を以てなりへ
ちとを其の極に達し空こたふらむらう
とありんふなり

一此より又作りぬみ稚子を射て人の許みさうと
浮勢物梁の極乃はらり枝ありてさつちてさう
小て

家たのもるる極ありちあり一歩もわくぬものふをさす
といふをとりて

定基

さうなり一歩もわくぬを又老くをへち代のさう
と達して流るる押水谷中將を以て列座
して内府とけち難あり何なりは流との路あり押

水鏡後清水谷後形とこととを形一孝隆いゝみ坐
の形ふいてみ海をんとて老かくをへさつはりて中
え海をとり形を後古今に老々と形やとあ形を
いゝみ右今水乞態ハ法けらまはせぬつ法教ハ
つはりぬととり老かくとさんとつあへさつ
そをハ法うさうとりやまを老かくとつとまさんとり
形を後さきはの。水内府に老をかくとを屋さ
まきハ形とと老くくとと己形ととの形子

一内府にたまへ水誰彼に咄く内府に衣をて
うつとを志さうりあうつあともハ此零あもあ形とあ
てハ世うとさうりとの形も水に某四手とせてさし
むつひて二人に四人うつりあやとりとて世ハ由こ
讀あ形かとれたまふさきハああ志も四手と書ハ
外読とら上あむつとの書さるぬ
一詠詠ち詠て形と書みと書に讀ハ
何う家外あ、積ああうと己形

父くのもめへ世也不立也——あつちまでと云ふ事くさあり
 叶秋より難あつて証ちりみら外不あり候也同也を
 候るるいふことつていふを少や意分ありと云ふ物も
 心を好くむこと何れむ。

一あきふ——のちいた秋の風ハ品ノ字たもくあき
 たるのちハ中吹風ハ秋のふこ——抄ふは存り
 さもやと向ふ事あると秋風ハさひ——と物こ

一新古今巻頭乃秋ハふり——のハ山と云ふむハ新乃
 字ハあろ白雲のふてあ——星ハ古ノ字也去手と
 いもんふこ——とやいもんの秋と左今の二字を好く
 かつ

一鈴鹿川ハ十。秋ハ波ハぬきく次ハどこぬきぬ
 と候ぬきもぬきもはつちあり候事ても
 幣までぬきをこ——たあを——候

一近代の上キハ西ニ条ハ教ハ之秋を讀せらさても
 片んと人玉かきぬた人あり 押小秋夜心安き

此歌やまゝの詞書の程なりとの志を々々とたゆし
あさ清しき書物も人々もまゝにまゝにわかれし止し也
故由集形書にあらうなりナラうそりも書かぬて
あし内り

寄山意

好あさ清きも林庵あたつ橋つたたくしをぬこつ意の
山

橋雨

あさ清う露と雨をかさねて風は波ふるおひり野田のせ橋

八月十五日あまのつりしは

あまのつりしはあまのつりしとみたきつゝ花のあはれも
一長徳ち歌今の海実教今法歌としてあまのつりし
親の親とかまへのほきかまの山子か子の末は末も憐れ
かまへのほきかまのつりしとみたきつゝ

川こめて行い^{つら}かくは山吹の花は八重垣をこもる
本歌はあまのつりしとみたきつゝとこもる
のまゝにあまのつりしとみたきつゝとこもる

ふさかへて月三へもね板底をや強何うせ不破の関守
と括りし一信法歌ふくして法橋様也りしこと
その葦月板の經天の娘ち好りしこといひ傳ふ事ごと
それよりちしちつし經天のありし内府云一寸五分
ハセまゝと括りし一寸五分と一寸九分ふたぢ
て法用ひをしし

一經天の初をすし其の五母もかゝるは自初
ハ二初の既をそろへて書右初ハ一字おと下て

書及し既の字志名をうるは加初をうるはは是あ
ひきハ初をまゝか及して書りししきことかあし
書てくけぬもしきあふ来てくけぬもあを海ハ
甲一括りも未也上句ハ下にをうと川下て
書ぬるうらぬこ

一舎の師懸ハ初ハ初ぬこと古影を同へし
たしくハ七八人あつとと十も影をへし二も
つ、その座のき人加若うあてかあへし九も初と

の半いゝるゝとせし

一文書のかきりに 祝蓋を引く之世間も今
阿ふ祝ひのこ小一今の新紙おの好く祝蓋
こ加事こ形も祝を絶入一

一今の新讀上ケふ私ふ何存んも唱ぬるたと形一
たよく巻歌ふても一存んこ天子の御製ハ五存
人親王ハこ存ん拵家ハこ存ん内府云のよく
款も名うさ人の款ハ二存んこ私のきあても

宗通形少の款ハか一その得あるへ一

一懐紙法辨の後ハ秋日と書ふとら一季を不未

同、字も堂上のおと存人ハ不書

秋、日詠二首和歌

秋日詠初秋風

懐紙の強も手をあせて手一本をうて

和歌

秋日と書をくむ款ハ半字海字上てまらし

熱して流らりあぬとみふくも此之二首乃

懐紙ハ詠を知ら秋字半字海こ下て来ん

款の流とハ一字おと下款と一首の懐紙ハ九十
九と書二ハ字おと二首懐紙ハ詠書のとく
二行ハ書と和款の二字ワキハ書と字流の
そろふハみおと一也字平たうハ字五ともの
一ハみおと一也字平たうハ字五ともの
書と字おと一ハ字ハ下と上とに切てハ書
と字おと一の字切ハ九十九ハ一ハ書と
款名のハ字おと一ハ字平たうハ字五ともの

句錦ニそのうちと見ころし一也或ハ乃其の
字かゆるこ

一地下の舎小を座の上と書うるハ海一也
下ノ指ハ下ノ右の下ノ指うり右の上ノ指ハ下
むろり堂上ニカうハ式と同ハ一ハ懐紙を
下ノ指ハ下ノ右の下ノ指うり右の上ノ指ハ下

一詠書を換ハ二ハ字おと又堅立ハ二ハ字おと
詠書詠書四ハ字おと二条家の流

一禁裏仙洞清々の体奉行、歌と當日在書
誰々と名乗しては、いさ歌、こ歌出するを
奉行の儀をこ奉行みて、海んころの筆起り
又ハ清制衣の儀とて、合とて、清制衣を起こ
一誦の儀一そくくのりて、何のりて、何とて、
あく及一そくくのりて、何のりて、何とて、
あみえて、いさ歌、いさ歌、いさ歌、
いさ歌、いさ歌、いさ歌、

一勅令の歌ハ、公家位親下て、筆起、古実
とて、いさ歌、いさ歌、いさ歌、
いさ歌、いさ歌、いさ歌、
一古実と書こも、こつと清て、清り、
一其ハ、いさ歌、いさ歌、いさ歌、
いさ歌、いさ歌、いさ歌、
いさ歌、いさ歌、いさ歌、

一文書の上ハ、川合、杉原、武蔵、武蔵ハ、川合ハ、

懐紙をたてち改つた兜柄をい証書の料こ
一懐紙を文臺の下ふまへ下箔のうす下
箔をわらの舎ハ上ふまへ——
一誦師の孫と文臺^間乃^{五寸}
一舎はゆわさけ若燈臺ハゆり次としてこ
ま記は来も好も堂上ふて見及を次とこ
一懐紙をみるはこちぬ左の角を指こつて
おこへみてハ左ふまへのけく——して次の款をみる

形をこちたつとわ——おこへ福をこまへ——
一短人へ短ハ短冊を左の手ふまへつたぬ
短冊ハ右のわさけ換ら——て款をみて下
ふまへを——換ら——短人ハ上の二カ
うりこ記ありと下に重福くみる
見終つ——短人ハ短冊のわさけのこ
一懐紙を重福た記を二つお上ふたつ下の短冊

辛卯月日 某亭 月次

短尺重子た体下の短尺の裏まつ中

辛号月日 某亭 當座

辛号何子とをわけてえごはる

一 百号題を切て為座此形子用る体短尺

裏まつ

一 号の体安座めさきとわ字通つ

一 中の又文字の終りの字と下句此上七

の終りと一 字終るを連叙おれんこと

ハのハ乃終るつ字ハ耳おきつこ耳ふたぬ

をらう

一 スる此光のとさきまを此日乃らんを抄お

もごやかくい屋ことさめあハ終る

こらひーくいてたさへーあへんことを福ら

終るやと内府公

一 誹ハ此のま終るをいといふハ以也緋字之

芳らうあやほりすあさみえら

一和歌得業生

傍本未成撰

藏人

一御時

御賀

御八講

一朝云氏小ら梨てあさ又ともとらみかみり
を同云公本お限り次名意の上ふあといりさ下
あていごとと續

一内府公清新あて或傍る奄集ハ志あつて
て漢りうさ形り想別を福字の下ハふころ
うらうらうと子倍の一人い子換さのたまひてもむ

かーらうと古今集少清てこみ海をこひたり
内府公早あはきりよこのたまあ

一影あていつあてと郭公と書へー子親杜

鶺鴒あてハ夫屋りり次 古累小杜能取家へ来て 秋ふハ

いつまきまてとも歌ーりり次

一形のかく歌とい子詞古歌あまらあへ歌は
漢をい公家衣のき返るる

一幸隆師取次あて中院右納言通形

清川才に於て同見本海



正徳元年之秋寓于京師聞六窓
公羽之塵談而竊紀而秘函底公羽氏
松井名幸隆中院内府通茂公高
弟也

度會常彰

寶曆六丙子年孟春廿二日

藤原有親寫之



